

国際会計基準（IFRS）の到来を機に、「企業経営」と「監査法人」のありかたが劇的に変わろうとしている。新たな時代の企業経営、監査法人とは何か。設立3年目の中堅、「監査法人アヴァンティア」の法人代表、小笠原直氏に聞いた。

IFRSによる大変革期

高度なサポート力で前進

会計のパラダイムシフト CFOの役割、経営に直結

——企業の最高財務責任者（CFO）の役割とともに監査法人の役割も様変わりしている。

会計の世界にパラダイムシフトが起きている。2000年までの会計に求められたものは「過去の取引をいかに正確に会計処理するか」だった。しかし会計ビッグバン以来この10年、「将来を予測して資産・負債をどう評価するか」に軸足が移った。連結財務諸表を舞台に、金融商品の時価評価、減損会計、退職給付債務の導入などが相次ぎ、また資産除去債務や包括利益など、すべてこの流れに沿ったものだ。IFRS導入はこの総仕上げといえる。

IFRSの目的は端的に言えば「投資家向けに企業の将来像を示

教科書にない事態に対応、自らの「判断力」高める

——高度なサポート力とは。IFRSは細則の数値基準を示さない「原則主義」に立脚する。「実態に即し、自ら将来を考え経営判断を示せ」というわけだ。固定資産の減価償却ひとつを取っても、「税法でそう定めているから」といった、通り一遍の対応はもはや不可能。例えば、まず「このビルを将来どうするのか」という経営判断が必要であり、同じビルでも構造体、外装、

内装など固定資産の内訳ごとに「コンポーネント・アカウンティング」で区分して管理し、それぞれの耐用年数を自らが決めて適切な償却方法を選択する必要がある。つまり従来の会計の教科書にはない、新たな判断を求められる。当法人は国内外の情報を収集して判断力を磨くと同時に、総合建設業など外部の専門家とも連携して「解」を追求し、経営をサポートする。

時代を切り開く「若さ」、顧客企業とともに前進

——計39人、平均年齢30代前半の中堅監査法人だ。目指すのは「自ら判断し、複雑な事象を明快に説明できる自由職業専門家の集団」という監査法人本来の姿。会計知識だけでなく、英

語など語学力の強化や、顧客上場企業の経営者と膝を突き合わせての年4回の対話、外部評価機関による「従業員・顧客満足度（CE・CS）調査」とそれに基づく経営改善などに取り組んでいる。また欧州9カ国の監査法人ネットワーク「I2AN」に参加。今年も中国も視野に入れ、最新情報を顧客企業との勉強会「IFRSネットワーク」などの場で還元し、切磋琢磨（せつさたくま）していく。長期的に目指すのは単なる規模拡大ではなく「質的に成長し続ける」こと。アヴァンティアはイタリア語の「前進」に由来する。IFRSによる大変革期を迎え、幕末の志士のような気概で顧客とともに前進していきたい。

企業経営の新たな視点

「監査法人」編

トップインタビュー

監査法人アヴァンティア
法人代表 小笠原 直氏

（おがさわら・なおし）

1965年生まれ。公認会計士。一橋大学経済学部卒。大手都市銀行、準大手監査法人代表社員を経て、2008年5月監査法人アヴァンティア設立、顧問上場企業10社を抱え、IFRS専門デスクも設置し、業界20位の中堅監査法人に成長中。公認会計士修了試験委員、慶応義塾大学准教授も歴任。



（おがさわら・なおし）

広告

Avantia
監査法人アヴァンティア

Avantia Consulting
株式会社アヴァンティアコンサルティング

東京都千代田区三番町5-40 ミヨシビル6F TEL 03-3263-7681

http://www.avantia.or.jp/